

ディケンズ批評 発展の時代

J. H. ミラーのディケンズ批評

A Cultural Reading of J. Hillis Miller's Dickens Criticism

原 英一

Eiichi HARA

ミラー (J. Hillis Miller) の『チャールズ・ディケンズ その小説の世界』(以下、『ディケンズ小説の世界』と略記)が出版されたのは1958年である。この頃の英米でのディケンズ批評は、ウィルソン(Edmund Wilson)やオーウェル(George Orwell)の挑戦的な論文、リンゼイ(Jack Lindsay)のマルキスト的評伝の影響によって、かつての無視と偏見をようやく脱して、本格的な再評価を開始していた。ミラーがディケンズ再評価の潮流の代表であり、今日に至るまで絶大な影響力を有しているのは周知の通りである。ちょうど私がディケンズを読み始めた頃であるディケンズ没後百年の1970年にはすでに別格の必読書であった『ディケンズ小説の世界』は、現在でもなおディケンズ研究を志す若い研究者にとって、読まずには先に進めないものであろう。しかし、さすがに半世紀近くを経てしまうと、彼の業績を冷静に振り返り、歴史的コンテクストの中で捉え直す余裕が我々にも生まれてくる。ここでは『ディケンズ小説の世界』が20世紀後半のディケンズ批評に与えた意義を再考し、さらにこのような批評を生み出した文化的背景を考えてみたい。

ミラーに独創性はあるか？

今にして考えれば、ディケンズ批評に対するミラーの影響力には大きなものがあつたことは否定しようもないのだが、実はそれは表面的なレベルにとどまり、本質的な面で批評の方向を変えるほどではなかつたのではないだろうか。私自身もウィルソンとミラーから出発したことは確かだが、自分の思考方法や研究態度に根本的な変革を迫るような、極端な言い方をすれば文学に対する見方にコペルニクスの転回を迫るほどの力があつたのはパフチン(Mikhail Bakhtin)とデリダ(Jacques Derrida)だつた。ミラーは思想家ではない。彼の本領は、優れた思想家の

手法や洞察を巧みに自らのものとし、実に鋭利なテキスト分析をしてみせるという点にある。つまり応用の術にたけているのだ。このことは彼の長いキャリアのほぼ全体にわたって基本的に見られることだが、彼の出発点であるディケンズ研究にすでに明瞭に表れている。

『ディケンズ小説の世界』はジョルジュ・プーレ(Georges Poulet)に献呈されている。プーレは1952年から57年までの間、ジョンズ・ホプキンス大学でフランス文学教授を務め、ミラーの謝辞によれば、その間にミラーに多くの助言を与えてくれたとのことである。このことはミラーの批評態度がどのような基盤に立っているかを理解する上で有用な情報となる。『人間の時間の研究』(1950, 邦訳1969年)や『円環の変貌』(1961, 邦訳1974)等の著作で知られるプーレは、フランスのいわゆる「ヌーヴェル・クリティック」の代表者であった。その手法は精緻きわまりない文体分析、テキスト分析を主体とするものであり、ロラン・バルト(Roland Barthes)やデリダも、プーレが敷いた礎石の上に独自の文学論や哲学を築いていったと言っても過言ではない。構造主義からポスト構造主義にまで至る、現代英米批評を良くも悪くも支配するフランス思想の先駆者の一人であったのだ。ちょうどアメリカでも「ニュー・クリティシズム」がもてはやされた時期でもあり、ミラーがテキスト分析、深層の文体論に自分の批評活動の焦点を定めたのも、彼自身の感覚の鋭さの証左であるとともに歴史的な必然であったとも言えるだろう。しかしながら、その点に、批評家としてのミラーの弱点をもまた見ることができる。彼は他人の方法論や発見を巧妙に吸収し、それを練り直すことによって自分の批評体系を作り上げているのである。

その最も典型的な例は、ディケンズ没後百年記念の年に出版された「リアリズムのフィクション 『ボズのスケッチ集』、『オリヴァー・トゥイスト』、そしてクルックシャンクの挿絵」という論文である。この中で、ミラーは、ヤコブソン(Roman Jakobson)の有名な論文「言語の二つの型と失語症の二つの型」を援用して、ディケンズの初期作品におけるメトニミー(metonymy)を詳細に分析している。粗く要約するならば、ディケンズでは無生物があたかも生き物であるかのようなふるまいをすることがしばしばあり、ヤコブソン流のメタファーとメトニミーの区別は必ずしも有効ではないこと、ディケンズの小説のリアリズムは一種独特のものであることを立証している。テキストと挿絵を徹底的に分析するその力業はまことに読み応えのあるものである。しかし、読み終えた後、冷静に考えてみると、この議論はつまるところヴァン・гент(Dorothy Van Ghent, ミラーも一度だけ注記している)のあの驚異的洞察に満ちた論文「ディケンズの世界 トッジャーズ下宿屋からの眺め」で言われたことを一歩も出ていないのではないかと感じてしまう。言語の本質を突き、文学研究、特に文

学史の研究に大きな示唆を与えたヤコブソンの議論についても、それが単純には文学研究にあてはめられないというごく一般的な批判をしているに過ぎない。結局本当に優れているのはヴァン・ゲントでありヤコブソンであって、ミラーは彼らの主題に巧みな変奏を奏でているに過ぎないのである。

しかし、だからといって、ミラーの功績を否定するつもりは全くない。『ディケンズ小説の世界』で論じられた『オリヴァー・トウィスト』における「窒息」のイメージや『荒涼館』における「視覚」の重要性など、ミラー自身によるすぐれた洞察が、これらの小説の深い読みの可能性を切り開いてくれたことは間違いない。私がミラーから学んだのは、自分のような凡庸な人間でも、すぐれた眼力を持つ研究者や批評家の知恵をうまく利用すれば、小説をもっと面白く読むことができ、ついでに論文も生産できるということであった。もちろんミラー自身は凡庸でもないし、いつも他人の力に頼ってばかりいる批評家でもないことは認めなければならない。彼の仕事はその後も精力的に続けられたのは周知の通りで、その旺盛な好奇心と活力にはただ脱帽である。ポスト構造主義の批評家を「神秘的批評家たち」(uncanny critics)と呼んだセンスの良さも抜群で、80年代に批評の地図を描くとき、ジョナサン・カラー(Jonathan Culler)と並んでずいぶん役に立ったものだ。

悲劇的なディケンズ像

『ディケンズ小説の世界』の他にも、初期のミラーは19世紀イギリス文学についていくつかの重要な貢献をなした。『ヴィクトリア朝小説の形式』、『トーマス・ハーディ 距離と欲望』、『神の消失 5人の19世紀作家たち』である。これらの評論を見れば明らかだが、この頃のミラーには文学作品に表れた自我の分裂ないし喪失と回復についての関心があったように思われる。このような関心は歴史的、文化的背景に基づくものであり、1950年代に新たに作り直されたディケンズのイメージが、その最も深い基礎を形成していたのであった。ミラーによるディケンズ研究はこのような背景を理解することで批評史あるいは文化史の中に立体的に位置づけることができるのである。

ウィルソンが先鞭をつけ、第二次大戦後に急速に拡大したディケンズ再評価の根底にあったのは「悲劇の人」としてのディケンズ像である。生前はその破天荒な笑いとユーモア、カリカチュア的でありながらリアルでもある人物造形、おらかな楽天性によって人気を博し、それゆえに死後はインテリ層から長く白眼視あるいは無視されることになったディケンズは、「暗い作家」、魂の分裂に懊悩する作家として「再生」された。この悲劇的ディケンズ像を決定的に確立し、多大な影響を及ぼすことになったのは1952年に出版されたエドガー・ジョンソン

(Edgar Johnson)の伝記『チャールズ・ディケンズ、その悲劇と栄光』である。ウィルソンの論文もジャクソン(T. A. Jackson)などの偶像破壊、スキャンダル暴露的ないくつかの伝記の出現を背景にしたものであったが、ジョンソンの伝記はその表題にある通り、「悲劇の人」としてのディケンズ像を描きあげた。それは家庭と中産階級の価値の守護神でもなければ、スキャンダルにまみれ、他の多くのヴィクトリア朝ジェントルマンたちと同様に「秘密の私生活」を持った「落ちた偶像」でもない、自分の内面も含めたさまざまな悪と闘い、懐疑に苦悩しつつ、至高の芸術の創造に向かった悲劇の英雄としての作家の姿であった。英米の出版界では伝記が最も人気のある分野の一つであることは今も昔も変わらないので特に驚くべきことではないが、この本はベストセラーとなった。その影響力は、大衆にとってのみならず、インテリ層にもディケンズに対する見方を大きく変えさせるに十分なものだったのである。ジョンソンが伝記の各所に挿入している各小説の批評は、それ自体はとりたてて洞察に富んだものではないのだが、伝記全体の中にちりばめられることによって、一つ一つの作品もディケンズという人間がたどる悲劇的道程（それはもちろん芸術的勝利への道程ともされるのだが）の一里塚という意味を与えられている。こうしてみると、20世紀後半のディケンズ批評に最も深い影響を与えたのは、ウィルソンでもミラーでもなく、もしかしたらジョンソンのこの伝記だったのかもしれないと感じられるほどだ。若い学究の時代に、出版されたばかりのこの伝記を読んだミラーがそこから大きな影響を受けていたことは疑い得ない。だが、ミラーの方法論は、伝記的なものを基盤とするのではなく、テキストそのものに深く沈み込み、テキストの中に最後までとどまって一貫性のある読み方を追求するというニュー・クリティシズム的な、あるいはヌーヴェル・クリティック的なものであった。イメージや人物描写の精緻な分析を通して、テキストの深層を探索し、そこから新しい発見を得ようとするのである。

それでもなお、ミラーの研究は、実はある意味で伝記的なディケンズ研究なのである。彼はディケンズという人間の生涯をたどりはしなかったが、その作品を通して一つの伝記的物語を書き上げていった。『ディケンズ小説の世界』の序文で彼はこのようなことを述べている。

一人の作家が次々に書いていく作品の中心には、それぞれの出来事やイメージを通して少しずつ露わになっていくもの、捉えがたいが組織化しようとする形式^{かたぎ}があって、それが言葉の選択を常に管理しているのだ。この形式^{かたぎ}をもし我々が発見することができれば、作家が物質世界、他の人間たち、そして自分自身との間に持っている密接な関係について、どんな伝記的データよりも有力な手がかりとなるだろう。(ix)

ミラーがこの「形式」(form)を発見するための具体的な手がかりと考えたのは、

ディケンズの小説全体に見られる「本物のかつ有効なアイデンティティーの探求」(the search for a true and viable identity)というテーマである。このテーマが、ディケンズの小説全体を通して、彼のイマジネーションによっていかに表現され、変容していくかを追求したのが『ディケンズ小説の世界』であった。

結論でミラーは次のように述べている。

だから、ディケンズの主人公のひとりひとはポール・ドンビーのように、「その幼い心の中にずきずき疼く空虚を抱え、しかも外の世界全体はひどく冷たく、むき出しで異質である」(DS. 11)中に生きているのだ。彼は自分自身からさえ疎外されていて、自分の意識そのものを何か不可思議な、自分とは別なものとして見ている。・・・貧困と欠乏の中に生まれたディケンズの主人公たちは、自己の外にある何ものかを、自己以外の何ものかを、人間的なものですらない何ものかを常に探し求めている。それは自己を雲散霧消させ呑み込んでしまうものではなく、自己を支え維持してくれるはずの何ものかなのだ。したがって、私がこれまで示そうと試みてきたように、ディケンズの小説群は一つの全体を、統一された総体を形成している。この全体の中で、単一の問題が、すなわち有効なアイデンティティーの探求が何度もくりかえし叙述され、隠された中心へとほしいほしに近づいていく。その中心とは、世界の本質とその中に置かれた人間の状況についてのディケンズの底知れぬ不安なのである。(136-7)

自分探しの時代

このようにミラーがディケンズの作品に「アイデンティティー探求」さらに「実存の不安」という、一見していかにも20世紀的な統一テーマを見出したのは、もちろんそれがそこに存在するからである。ディケンズの作品がその時代の産物であるのみならず、時空を超越した普遍性を持っているからこそ、こうした現代的問題をそこに発見することができたのだ。だが、ミラーが1950年代の後半という時期にこのテーマに取り組んだことには、それなりの歴史的・文化的な背景があったことも間違いない事実である。現在の我々が手にしている文化批評の方法(作品を通して文化を読む、あるいは文化を通して作品を読むという方法)を使えば、『ディケンズ小説の世界』を通して50年代、60年代のアメリカの文化状況が見えてくるように思われる。当時は若い世代が、既製のものではない、新しい「自己」を求めてさまざまな試みを始めた時代であった。ヒッピーが出現し、サブカルチャーやさまざまな新興宗教が活況を呈し、既成秩序に対する「若者の反乱」が頻発した。第二次大戦後に獲得されたかに見えたアメリカの安定と繁栄は冷戦の激化とベトナム戦争の泥沼の中で動揺していた。「自分が何者か」を見失い、その失われた自己を探し求めることが、この時代の若者たちが希求していたことであった。(時間的にわずかに遅れるが私を含めた日本の「団塊の世

代」も似たようなメンタリティーを持っていた。) そんなとき、自分には理解できない異質な(alien)世界に投げ出され、その中で安定した位置を探し求めて苦悩するディケンズの主人公たちは、まさに同時代的感覚で受け容れられたのである。ミラーはそのようなディケンズを明瞭に表現してみせたのであった。

喜劇的ディケンズはいずこに

『ディケンズ小説の世界』がいろいろな意味で時代の産物であることは、このように明らかである。もっとも、どのような思想、批評についても同じことが言えるのであり、ミラーもまたその長いキャリアの中で、時代とともに変化していった。悲劇的ディケンズ像が過去半世紀のディケンズ批評を席卷してきたことは彼の責任ではなく、20世紀という時代と文化の責任である。しかし、長く続いてきたこのような見方、「暗く、悲劇的な作家」というディケンズ像が修正され、バランスを回復されなければならないことも自明であろう。死ぬほど笑いころげながら『ピックウィック』を読むことからディケンズ体験を開始した私には、コメディの作家としてのディケンズの天才性が正当に評価されないことがもどかしく感じられる。英米でも日本でも一般的に暗黙の了解となっているように思われる見方、すなわち喜劇のヴィジョンが悲劇のヴィジョンに劣るという見方がいかに浅薄で誤ったものであるかは、ウィリアム・ドリットの最後の演説やジョーがロンドンのピップを訪問する場面、あるいはサイラス・ウェッグの「ルーシャン帝国転倒史」朗読など、コメディでありながら(いや、それゆえにこそ)読者に底深い戦慄を覚えさせるような数々の場面を想起すれば分かるはずだ。喜劇の最高の形式は悲劇の最高の形式と一致するのである。構造主義・ポスト構造主義の時代の後には、ポスト・コロニアルのディケンズが論じられている。それはそれでけっこうだが、偉大なコメディ作家としてのディケンズをもう一度思い出してみてもいいのではないだろうか。チャーサー、シェイクスピア、ベン・ジョンソン、フィールディング、ジェイン・オースティン、そしてディケンズという英文学の偉大な喜劇の伝統に、ミラーに劣らず鋭利な切り口で迫る批評家はいないものだろうか。

Bibliography

- Jackson, T. A. *Charles Dickens: The Progress of a Radical*. New York: International Publishers, 1938.
- Jakobson, Roman. "Two Types of Language and Two Types of Aphasic Disturbances." Roman Jakobson and Morris Halle. *Fundamentals of Language*. The Hague: Mouton, 1956.

Johnson, Edgar. *Charles Dickens : His Tragedy and Triumph*. Boston: Little, Brown, 1952.

Lindsay, Jack. *Charles Dickens : A Biographical and Critical Study*. New York: Andrew Dakers, 1950.

Miller, J. Hillis. *Charles Dickens : The World of His Novels*. New York: Indiana UP, 1959.

———. *The Disappearance of God: Five 19th Century Writers*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1963.

———. *The Form of Victorian Fiction*. U of Notre Dame P, 1968.

———. *Thomas Hardy, Distance and Desire*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1970.

———. “The Fiction of Realism: *Sketches by Boz*, *Oliver Twist*, and Cruikshank’s Illustrations,”. Ada Nisbet and Blake Nevius, eds. *Dickens Centennial Essays*. Berkeley: U of California P, 1970.

Van Ghent, Dorothy. “The Dickens World: A View from the Todgers’s.” *Sewanee Review* 58 (1950): 419-438.

ジョルジュ・ブーレ 『人間的時間の研究』. 井内究一郎他訳 . 筑摩書房 , 1969.

———. 『円環の変貌』上巻・下巻 . 岡三郎訳 . 国文社 , 1973-1974 .